

附属学校・地域公立学校における特別支援教育普及の取組（２）

武田鉄郎（和歌山大学・教職大学院）・武内正晴（和歌山大学附属特別支援学校・校長）北垣有信（和歌山大学附属小学校・校長）・尾崎由美子（附属小学校通級指導教室担当教員）・小林史、向井直樹（和歌山大学附属特別支援学校）・田中千映（和歌山大学附属小学校）谷口英治、伊藤誠、釣本享子（和歌山大学附属中学校）・梶本久子（和歌山市立楠見小学校）小杉栄樹（和歌山市立砂山小学校）藤田絵理子（和歌山大学教育学部・附属３校教育相談コーディネーター）

（研究の背景と目的）

附属学校や地域の学校においても、多様な支援を必要とする児童生徒や保護者への対応が増加してきている。しかし、関わりの基本として、特別支援教育の視点を加えて対応するならば、児童生徒との関係性がスムーズに変化することもある。和歌山大学教育学部附属特別支援学校は、長年、地域の特別支援教育のセンター的機能を発揮し、加えて研究活動も継続してきた。そして校種の異なる附属学校、地域の小学校などへの直接訪問等のコンサルテーション活動を行なっている。

そこで本稿では、附属特別支援学校が中心となり、附属小中学校、また地域の小学校に対して、特別支援教育の視点を活用した児童生徒との新たな関わりの模索、契機となる４分野【①交流学习の深化 ②地域支援（学校支援）③「まなびっこルーム」の実践（通級指導教室）④附属３校コーディネーターの会について】の研究活動を紹介することを目的とする。

なお、昨年度に引き続き、今年度もコロナ禍という特殊な環境であったため、感染予防に細心の注意を払って活動したことも併せて報告する。

① 交流学习の深化について

○経緯

- ・附属小学校と附属特別支援学校小学部は、長期間、毎年、交流学习を行っている。コロナ禍に至るまでは、年間４回ほどを目安に取り組んできた。ここ２年間はコロナウイルス感染防止の観点から、子どもたちが対面しての直接交流学习は実施せず、お互いの動画で交流する間接交流学习を行っている。来年度は、コロナ禍が解消し、附属っ子同士の直接交流ができることを願っている。

○ねらい

- ・共通のねらいとして、「共に学び、共に遊ぶことで、お互いを知り合い、仲間意識を育てる」ということをあげている。特別支援学校の児童については、普段と違う集団の中で同世代の仲間とかかわりを楽しんだり、自主性や社会性を育んだりすることをねらっている。附属小学校の児童にとっては、多様性や共生を学ぶ機会になっている。

○内容

- ・昨年度に引き続き、コロナウイルス感染拡大の影響で、顔と顔を合わせての交流学习は実施できていない。各校の担当者で、打ち合わせを行い、今年度は、ビデオや手紙を通しての間接

交流を行うことにしている。具体的には、各校の取り組み（劇あそび、音楽発表等）を視聴し、ビデオレターなどで感想を交換し合って交流を進める予定である。

○成果と課題

・交流学習が単発で終わらないように、学習の前後の各校教員の打ち合わせを行う等、取り組み活動の充実が必要である。附属特別支援学校の使命としては、附属小学校に対して、障害理解、多様性を含む内容のオリジナル出前授業等、学習協力である。今後の課題として、交流学習で学び合うことを通じて、双方の児童がどのように変化したか、どのような気持ちが芽生えたか等の評価により、改善点を見出す必要がある。また、交流に係る各学校の教員間の連携を深め、附属特別支援学校の児童について、附属小学校教員が理解すること、双方の児童にわかりやすく、楽しく参加しやすい学習内容や支援の充実が急務である。

② 地域支援（学校支援）について

○目的

・地域の小学校で、困り感を抱える児童及び教員のニーズに応じた教育支援を行う。

○内容

・和歌山市立小学校A校、B校への直接訪問・授業観察・相談支援
・附属小学校への授業観察・相談支援

○成果と課題

・事前に、メールや電話等で担当教員から相談の主訴を聴きとることで、支援する側もイメージを持ちやすくなり、対象児童の実態や課題等を把握しやすくなった。
・子どもの行動を関係者（複数の眼）で、幅広くとらえることで、子どものしんどさの背景を教員間で共通理解することができ、その後の支援につながった。
・学校で孤立しがちな特別支援教育コーディネーターや担任の不安な気持ちを聞き、共に考えることを基本とした。チームで子どもを観察し、支援することの大切さを伝えること等を通して、校内支援体制の基盤づくりを進めることができた。
・訪問校の管理職の協力も得ることで、連携がさらに促進された。
・「特別支援教育」からの見方で、環境要因なども合わせて子どもの言動を読み解く視点を伝えることで、教員が焦らず、関わる際にゆとりが生まれた。
・特別支援教育の視点から支援の提案、教材の提案等を行ったが、提案を日々の実践に即座に生かし、子どもの様子が変わった等の報告があり、相談活動の成果が見られた。
・経年、実態を見てきた児童においては、担任や学校の理解が進み環境を整え、学習面、生活面、保護者との関わりで、良い方向に向かうなど学校での支援成果が見られた。
・今年度は、授業見学後のコンサルテーションは、複数担任との個別相談という形態になったが、訪問校の学校支援委員会組織や校内コーディネーターとも連携を取りながら、研究を進めていくなど校内支援体制との連携構築が課題である。

③ 小学生対象、通級指導教室（まなびっこルーム）の実践

○目的

- ・附属小学校で、学習や集団活動において困り感を抱える児童に対して、個別のニーズに応じた専門的・系統的な指導や支援を行う。

○内容

- ・小学校 まなびっこルーム（今年度新設）

（これまでの経緯）

校内に特別支援教育のニーズがあることから、2019年秋より附属中学校の「松の実教室」、小学校では2020年秋より「はごろも教室」を実施し、自分を良く知り、友達との関係を意識する、コミュニケーション能力を向上させる、学習のコツを意識するなどの内容で、「下地づくりの教育」を行い、これまで2年間の実践経緯から、児童生徒も休まず参加し、活動を楽しんだ。またそれに対する保護者のニーズの高さを確認できた。

（通級指導教室「まなびっこ」の特徴）

その後、2021年4月、附属小学校において「通級指導教室」がモデル事業として開設された。専属担当教員（通級指導教室指導経験者）が配置され、週3日、授業中や放課後の時間を用いた個別、グループ指導がなされた。専属教員「学び方を学ぶ」という通級指導の願いや目標も名前に込めて「まなびっこ」と命名している。初回、通信には通級指導教室の存在意義について「一人ひとり顔や体の大きさが違うように、それぞれに得意な学び方も違います。まなびっこルームでは、個々に合わせたわかりやすい学び方を創意工夫していきたいと考えています。保護者の皆様や担任の先生方とも連携を取りながら、子供を真ん中にしっかりとつながっていただけるようにと願っております。」と記載されている。

通級指導教室専任教員と附属特別支援学校校長が中心となり、新規開設の教室に関連した組織づくりを強化し整備した。特別支援学校校長は、週に一度、定期的に小学校通級指導教室を訪ね、担当教員とのコンサルテーションを行い、附属小学校管理職、和歌山大学大学特別支援教室、武田鉄郎先生とも協働・連携する支援システムを構築した。

今年度、2回（3月に3回目を計画）、校内の気になる児童について、武田先生との校内支援コンサルテーション会議を計画、実施している。その中で、児童に関する客観的なアセスメントを行うことで理解が深まること、多様な情報を集め支援のために組み立てる大切さ、児童の発するサインから支援のタイミングを見極め、それに応じた対応を行うこと、保護者との連携など、幅広い特別支援教育の視座を得た。会議に小学校の管理職も同席することで、自校児童への深い理解、明確な配慮の必要性、さらに中学校生徒への汎化など、児童生徒の発達の側面と照合した学びにつながった。

（通級指導教室での指導内容）

個別の課題やニーズに合わせ、自立活動と教科の補充（認知の特性に合わせ）を中心に指導を行っている。また、学習だけでなく、コミュニケーション能力を伸ばすツールとして遊びなど、多様なバリエーションで対応している。

昨年度、「はごろも教室」に参加していた児童を核とし、今年度、さらに校内支援ニーズが認められ、保護者の同意が得られた希望者に、通級指導を行った。

児童の個別ニーズを見極めるため、通級指導担当教員、校内コーディネーター、担任、

管理職、スクールカウンセラー（言語聴覚士資格保持者、医療機関でのLD教育支援指導経験者）附属3校教育相談コーディネーターなど複数の目で、アセスメントや情報共有を実施している。保護者に対して通級指導教室の説明や、指導への同意を得た後、担任と連携しながら柔軟な支援を継続している。

（まなびっこにおける支援の目標、具体例、工夫について）

・コミュニケーション

お話タイム、出来事を振り返りいつ、どこで、だれが、だれと、何をどうした。気持ちは～を書くワークシートを活用する。相手にうまく伝えるための練習として、レゴブロックを使って相手に色や向き大きさなどを相手の視点になってわかりやすく伝える練習をする。

・漢字

細部を見比べたり、同じ部首を見つけたり、分解したりと漢字の覚える方法を一緒に考える。

記憶に残りにくく定着しにくい子には、読み上げ、空書き、なぞるなど多感覚を用いる。

アイパッドの音読アプリなども活用もする。

覚えた漢字を普段のノートや作文日記などにも使うことで定着させることを意識させている。

・算数

スモールステップで学習を進める。クラスの進度に合わせた学習補充、別に九九が定着していない子には、九九のます計算なども取り入れる。文章題が苦手な子には、図や絵などに置き換えて、考えさせ、具体物を活用する。自分の考えを発表させるなどコミュニケーションの力も併せて指導している。

・対人関係

小人数で一緒に、遊びやゲーム(カードゲームやボードゲームなど)を行う。マナーやルールを意識させ、お互いに楽しく最後まであそびを続けられるように支援する。うまくいかなかったときには、振り返りなども行いながら、どうすればよかったかを考えさせる。

・運動面

体幹保持が難しい子は、姿勢が崩れやすく、集中力が続きにくい傾向がみられる。そのため片足立ち、ボール投げ、卓球など簡単な運動を入れながら活動している。

・その他

不安の強さへの対応として、できるだけ見通しが持ちやすいように、その時間に活動する大まかな流れ(スケジュール)を提示する。自分で選べる活動も取り入れ、どちらをするかなど本人が選択する経験もさせる。本人の興味関心を知り、自分でやってみようと思うような工作などの課題も入れる。

○成果と課題

・通級指導教室モデル事業と実践は、教育学部附属学校の校種（附属特別支援学校と附属小学校）を超えた、教育連携の機会となった。それぞれの学校管理職が連携協力に率先することで、小学校での特別支援教育の促進という大きな一歩に貢献した。また、教育学部の特別支援教室教員からのアドバイスを心得てケース会議を定期的に行うなど、大学との連携も促進した。

・通級指導教室の場所選定については、校内では比較的静かな環境、人通りが頻繁ではない場所、外階段を利用することで、他の児童との接触を少なくでき、学校内の教室以外で過ごす安心できるスペースとなるよう、小学校管理職が、附属3校教育相談コーディネーターも交えて協議し、配慮を行いながら準備を進めた。

・通級指導教室内には、コミュニケーションに役立つ掲示物、明るいインテリア、笑顔で歓迎してくれる専属教員（公認心理師資格も保持）の存在で、緊張感無く学習できる教育環境が整備されている。現在では、2年生から5年生までの男女9名が定期的な指導を受けており、児童や保護者から、自校内にこのような教室が新たに設置された喜びや、感謝の声も多数聞かれる。

・附属3校教育相談コーディネーターは、小学校管理職、教員と連携し、通級指導担当教員の持つ専門性や人的資源が、通常学級でのわかりやすい指導や支援役立つことを伝え、校内理解が広がるよう努めた。また通級指導教室担当教員と可能な限り頻繁に連携し、気になる児童への対応の工夫、情報伝達、情報共有、アセスメント、具体的支援、保護者との関係調整、通級指導教室指導を受けるメリットの説明により、通級指導につなぐコーディネートを行っている。

(通級指導教室担当教員の取組による成果)

・担任との連携

児童の実態で、教科書の読みに困難さがある場合に、タブレットに、教科書読み上げアプリをインストールすることを担任に勧め、テストにルビ付きテストを購入してもらうなどを担任に具体的な提案をすることで、多様な学びの実践につながった。対象児童には、学びやすさが保障された。

・授業を参観することによる個別の課題の確認

授業参観により、児童の実態把握に努め、担任との情報のやりとり、連絡を心がけた。

・連絡ノートの活用

通級での様子を、保護者の連絡ノートを活用した。担任にも、そのノートにサインを求め、通級の様子に目を通してもらった。校内コーディネーター、附属3校教育相談コーディネーターとの連絡ノートも作成し、現在の支援状況、情報共有を行った。

・校内への周知

学校全体に「まなびっこだより」を発行し（各学期に1回程度）、児童の学習の様子や、特別支援教育、発達に課題のある児童への対応などの資料を配付した。目を通してもらうことで理解・啓発を促した。

(まとめ)

・今後も、「通級指導教室」という新規の校内資源を広く周知し連携を継続し、児童の幅広いニーズへの理解、多様性を受け入れる教育環境づくりを心がけることが重要である。

また担任を中心とした特別支援教育のスペシャリストが加わる複合的・多層的な支援チームで協働することで、児童にとって安心できる学びの場がより強固になることが実証された。児童の個別な状況を、校内、大学を含む広域のチームメンバーでアセスメントすることで、わかり

やすい教育を発展・深化させ、整備することが求められる。

④ 3校コーディネーターの会の開催

○目的

- ・附属3校の校種を超えた連携を深める。顔の見える情報交換により、それぞれの学校ニーズを把握し、独自の支援の工夫などから学び、自校の支援に役立てる。

○内容

- ・学期に1度開くことを目標にし、本年度は1学期6月29日、2学期11月9日、3学期2月9日（予定）に実施。
- ・附属3校の各校内コーディネーター、附属特別支援学校小学部主事、附属中学校校内教頭、附属3校教育相談コーディネーターが参加。
本年度第1回は、附属中学校副校長も参加、附属中学校会議室にて開催。
- ・3校それぞれの課題についての実情を報告しあい、質疑応答や討論により、連携を深めた。
- ・各校に在籍する不登校児童生徒に対する、個々の実情に合わせた支援や対応について情報交換を行った。
- ・児童生徒の実情、保護者の思いや願いをふまえて、学校としてできることを模索し、担任として悩んでいることなどが話し合われた。

○成果と課題

- ・コロナ感染症予防の観点から、参加者を少人数に絞ったこともあり、教員の本音が語り合える雰囲気の中、児童生徒の支援と、各校の取り組みの成果や課題について情報交換ができた。
- ・各校の不登校の児童生徒に対する個別の、また丁寧な対応の一つ一つが、教室に足を向けるきっかけとなっていることが報告された。
- ・個別対応の重要性が明らかになる一方、保護者とのかかわりには、細心の配慮や、エネルギーが必要となる。長期化する場合には、担任のメンタルヘルスにも留意が必要である。
- ・様々な対応に取り組むことは、担任業務を抱えながら難しいことも多く、チームで関わり対応を検討したりすることが大切である。

（文責 藤田絵理子）